



WJF 日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信



日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファンデーション=WJF）2018年9月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://wjf4464.la.coocan.jp/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫 外山喜雄



外山夫妻が歩んだジャズの道のに、日本人初サッチモアワード!

**おめでとうございます! WJF会報100号記念特集です
積年の活動が結実して若者も合流「祭りだ!ジャズだ!デキシーだ!」**

この会報は今回、めでたく100号を迎えました。それまでの歩みは第97号ですでにしっかり詳報させていただいています。そこで今回は100号を記念するにふさわしい記事として5月に催された川崎・新百合ヶ丘、昭和音楽大学でのイベント「祭りだ!ジャズだ!デキシーだ!」。そして同じく川崎市の洗足学園音楽大学での特別ジャズ講座にちなんで若者の間にも浸透してきたデキシー人気に合わせ、外山夫妻が歩んできたデキシーランドジャズの道のを振り返っていただいた。ルイ・アームストロングとめぐり逢い、ジャズの故郷でデキシー全盛時代を体現し、現地で伝説のジャズマンたちとも交流を続けた…日本の(いや世界の)ジャズ界は外山夫妻らとともに半世紀を超える多彩な道をいまも歩み続けている。そこにはいつもあの人、サッチモの姿が浮かんでいる。(10ページに特集記事) (小泉良夫)



(写真上)川崎・新百合ヶ丘、昭和音楽大学でのイベント「祭りだ!ジャズだ!デキシーだ!」コンサートのフィナーレを飾って、特別参加の学生さん、セカンドラインも、全員ステージに上って「聖者の行進」。同大学ジャズコース講師、池田雅明さん(tb、写真右端)とデキシーランドジャズ界の若手ホープ、青木研さん(bj、左から3人目)をゲストに迎えて熱演する外山喜雄とデキシーセインツ(写真下、右側)。いつだってサッチモおじさんは見守ってくれている(同左、故佐藤有三氏撮影)。

2年ぶりのサッチモ・サマーフェストで思いもかけぬ感動!!

日本人初! 「サッチモ・アワード」受賞

「日本のサッチモ 米で生涯功労賞」日経、産経、全国の地方紙も報道 -外山喜雄-

2018年スピリット・オブ・サッチモ・アワード

サッチモの故郷での受賞に感激!!

2018サッチモ・サマーフェストが、今年もサッチモ誕生日の週末8月3日から5日、ジャズ博物館が入る旧南部造幣局跡(ザ・ミント)中庭で開催された。セインツのバンドとしての参加は、2015年の出演以来3年ぶり。私達が1968年1月、初めて夫婦でニューオーリンズの地を踏んで50年目の記念すべき年。毎年恒例だったツアーの参加者のみなさんもお高齢となられ、迷った末のバンドのみでの参加。地元紙で人気コラムを担当し、長年私達の活動をフォローしてくれている、シーラ・ストラウプさんの記事がジャズ祭直前の日曜版に掲載され、私が「このツアーが最後の出演になるかも」と語ったことが大きな波紋を呼び、かえって嬉しすぎる出来事が次々と起こる信じられない旅となった。

ウinton・マルサリスの父

ピアニスト、エリス・マルサリスとともに受賞

スピリット・オブ・サッチモ・アワードは、サッチモの名を冠した生涯功労賞で、2018年度の受賞者はウinton・マ

ルサリスの父でピアノのエリス・マルサリス、トランペッターのアシュリン・パーカー、音楽教育者ベサニー・バルトマン、そして外山喜雄。永年のサッチモ研究を通じた音楽活動、そして銃に代えて楽器、ハリケーン被害支援等の草の根交流が大きく評価された。(ラッパの朝顔がモチーフのトロフィー)



この賞は 2015 年から始まり、毎年サッチモサマーフェストで表彰式が行われている。今までの受賞者には、プリザベーション・ホールやルイジアナ州立博物館、地元FMラジオ局 WWOZ、ダウンビート・マガジン、マルディグラの黒人パレード団体でサッチモも王様になった事があるキング・オブ・ズールー、地ビールで最高の味のアビータも受賞、ミュージシャンとしての受賞はトロボーン・ショーティーの兄ジェイムス・アンドリュウ、エリス・マルサリスと並んで3人目という名誉。

サッチモのスピリット(精神)賞!!

なんという嬉しい賞でしょう! 初めて夫婦でニューオーリンズの地を踏んで50年、皆様に応援して頂き、思いもかけぬこの上ない喜びの受賞となりました。

この賞は応援して下さいの皆様と

共に受けた賞だと思っています。

浦安在住の外山喜雄さん ▶▶

【ロサンゼルス=共同】「サッチモ」の愛称で知られる米ジャズ音楽の巨匠ルイ・アームストロングの生誕地、南部ニューオーリンズで13日までに開かれた音楽フェスティバルで、1990年代から日米草の根交流を続けてきた「日本のサッチモ」と呼ばれるミュージシャン、外山喜雄さん(74)＝浦安市＝にサッチモの名を冠した生涯功労賞が贈られた。

同賞は「スピリット・オブ・サッチモ・アワード」で日本人の受賞は初めて。高校生の時からサッチモの音楽や人柄に魅了されてきたという外山さんは取材に「こんな名誉なことはない」と喜びを語った。

外山さんは同じくミュージシャンの妻、恵子さん(76)と68年から約5年ニューオーリンズで音楽修業。帰国後は東京ディズニーランドなどで演奏を続けてきた。

90年代に再訪したニューオーリンズの荒廃ぶりに驚き、恩返しのために学

日本人初「サッチモ・アワード」受賞



音楽フェスティバルに出演した外山喜雄さん(4日、米ニューオーリンズ) (ZACK・SMITH氏撮影、共同)

校にトランペットなど約850の楽器を届けてきた。こうした楽器を使った子供の中からプロミュージシャンも生まれたという。2005年のハリケーン「カトリーナ」で被害が出た際も被災者支援を行った。

外山さんはサッチモの誕生日に合わせたステージで賞を贈られた。「天国のサッチモからの、うれしいいたづらに思えた」と話した。

米AP通信を通じ世界へ！！

Japanese Satchmo honored in jazz birthplace of New Orleans

日本のサッチモ、ジャズの故郷ニューオーリンズで表彰 ロス共同通信も日本向けにニュースを配信

AP通信掲載写真より 撮影: Jay Reeves 記者

私たちのステージに感激してくれたAP通信のジェイ・リーブス記者。前日、私たちが50年程前に世話をしたドラマー、天才少年だったシャノン・パウエルバンドに飛び入りしたのを偶然見て興味を持った。翌日のステージで、日本からのバンドがサッチモ賞を受賞、ジャズ祭一、二を争う観客数、熱狂的な拍手。これに感激、このAPの配信にロスの共同通信が共感し日本向けに配信、日経朝刊全国版、産経千葉版、東京新聞千葉版、地方紙は北海道から沖縄まで『日本人初！』との見出しが並び、私達も夢にも思わない展開となった。これもサッチモの悪戯？！

日本経済新聞全国版 朝刊社会面 8月14日



ジャズで草の根交流

**「日本のサッチモ」
米で生涯功労賞**

【ロサンゼルス＝共同】「サッチモ」の愛称で知られる米ジャズ音楽の巨匠ルイ・アームストロングの生誕地、南部ニューオーリンズで12日までに開かれた音楽フェスティバルで、1990年代から日米草の根交流を続けてきた「日本のサッチモ」と呼ばれるミュージシャン、外山喜雄さん

賞が贈られた。
同賞は「スピリット・オブ・サッチモ・アワード」で日本人の受賞は初めて。高校生の時からサッチモの音楽や人柄に魅了されてきた外山さんは取材に「こんな名誉なことはない」と大喜び。外山さんはサッチモの誕生日に合わせたステージで賞を贈られた。

サッチモの名を冠した賞を贈られる外山さん(左)(4日、米ニューオーリンズ)＝ZACK SMITH氏撮影・共同



サマーフェストのジャニス・フォークスさんから感激のトロフィー

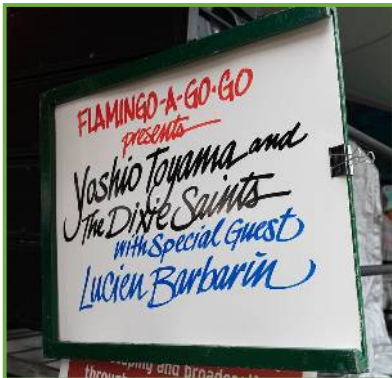


Photo: Zack Smith (Satchmo SummerFest)

ゲスト・トロンボーンにルシアン・バーバリンを迎え
サッチモ・サマーフェストで絶好調のセインツ！！
 ニューオリンズの名門ジャズクラブ、
 スナッグ・ハーバーからインターネット中継も！

**セインツのメンバーもゲストのルシアンも
 笑顔にあふれ、地元新聞のトップ記事に！！**

今年の渡米メンバーは、私達二人と広津誠(c)藤崎羊一(b)木村おうじ純士(drms)の5名、現地でニューオリンズ No. 1のトロンボーン、ルシアン・バーバリンが加わった。ルシアンは、ハリイ・コーニック JR との共演が多く、NYに滞在していたが、今回セインツとの共演を快諾し出演してくれた。彼は「僕はセインツのトラミー・ヤング！」と、嬉しさに本当に共演を楽しみにしてくれていた。

地元が一番有名なライブ、スナッグ・ハーバーのジェインの計らいで、ジャズ祭前日の2日(木)に出演させることとなり、ラジオ局WWOZの録音録画、インターネット中継も入ることとなった。次の日の出演は、エリス・マルサリス、という光栄な出演だった。

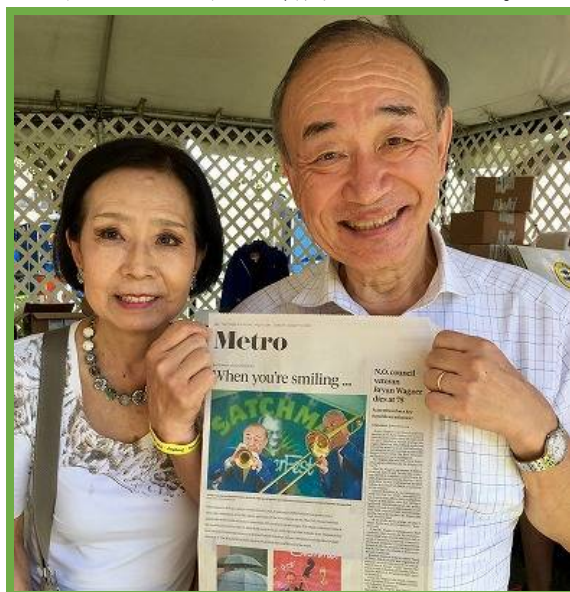


トロンボーンにルシアンは、私達のニューオリンズ修行時代まだ14, 5歳、ギター奏者ダニー・バーカーが子供達を非行から救おうと結成した子供ジャズバンド、フェアビューのメンバー、当時はアフロヘアーでスネアをたたく可愛い少年だった。この子供たちのバンドの素晴らしいスウィングとサウンドの思い出が、「サッチモの孫たちに楽器を」を始めたきっかけだけに、彼との共演は感無量だった。



ルシアン 1971年 15歳

スナッグ・ハーバーは8時と10時半の1時間20分2回ステージ、お客様の入りや中継の緊張でのスタミナ等心配していたが、心より楽しく演奏でき、客席も満席、両ステージともスタンディング・オベーションでアンコールと、メンバー全員心より楽しくまた感激した最高のライブだった。



お客様の中には、1971年イギリスと大陸をツアーさせてもらった、かつてのバンマス、バリー・マーチン(ドラム、現在ニューオリンズに住みGHBレコードでAMの再発等を担当した)が来てくれて昔話に花が咲いた。アルトン・パーネル、ルイス・ネルソンをゲストに迎えてのヨーロッパ楽旅等、本当に貴重な体験をさせて頂いた。また、現在サッチモ



研究の第一人者でNYサッチモハウス研究員、名著「ワンダフルワールド・オブ・ルイ・アームストロング」の著者リッキー・リカルディもハウスのスタッフと

もに会場、バンドの演奏、とルシアン vs 私の「サッチモ・トラミー・コンビ」も大いに楽しんでくれていた。

(写真:上 バリー・マーチン)

(下、サッチモ研究の世界的第一人者リッキー・リカルディ、著書の「ワンダフルワールド・オブ・ルイ・アームストロング」は外山恵子の愛読書。辞書を引き、日本語訳や青、緑、オレンジのマークで線が引かれた自分の本を見て大喜び！)



50年前、初めてのニューオリンズ

50年前初めて訪れた武者修行の地ニューオリンズ。右も左もわからなかったアメリカ。当時すでにインディアナ州のパーデュー大学に留学されていた、早大ニューオリの大先輩で大阪のニューオリンズ・ラスカルズの名ドラマー木村陽一さん。そして同じくすでにロスとニューオリンズに暮らしていたベースの荒井潔さんの助言には本当に助けて頂いた。50年後の今回、木村先輩の息子さんでトラッド・スタイルの名ドラマー、木村おうじ君と訪れることができたのも、大変嬉しい出来事で、お世話になった木村先輩にも大変喜んでいただいた！



ベースボール、英語で司会 隠れた才能が開花

おうじ君が素晴らしいガッツなリズムをたたき出すとともに、ルシアン人の力強いトロンボーン、ジャズの故郷の雰囲気反応したセインツは正に絶好調！



ベースボール（藤崎羊一）とおうじ君の名コンビ、「ビッグ・ノイズ・フロム・ウィネカ」も人気爆発！ベースボールの予期せぬ才能も開花した・・・



英語での司会である。カタコト英語というか「ジャパングリッシュ」な司会が、アメリカ人のお客さんに大うけ！まるでラスベガスのステージに立ったマジシャンのような風格に、バンドメンバーも目をぱちくり！！笑

サッチモ・フェスト 一番人気

サッチモ・サマーフェストの熱狂

AP通信記者も感激

最も光栄なステージ！

サッチモの誕生日に待っていた 光栄なサプライズ！！

8月4日（土）、サッチモの誕生日のステージに出していただけるのは、とても光栄なこと。ましてや午後1時半のベストタイムに一番大きなメインステージを任されるのは、この上ない光栄だ！ジャズ祭の心配りに心から感謝している。

ステージ担当の司会者に紹介されバンドが登場すると、サッチモサマーフェストの役員、ジャニス・フォークスさんとブレンダ・ソートンさんも登壇、スピーチを始めた。私達がニューオリンズの子供達に楽器を贈りつづけ、ハリケーン被害の支援もしてきたことの紹介の後、思いもかけないプレゼントが待っていた！それが全く思いもかけなかった「2018 スピリット・オブ・サッチモ・アワード」の贈呈だった。まったく知らなかった。思わず涙がこぼれそうになり、「サンキュー・ベリーマッチ。涙がこぼれそうなので、サッチモのバンドのテーマに入ります！」と言い、感激のサッチモ・ベースデイ『セインツ 2018』のステージが始まった！

感無量の2018 スピリット・オブ・サッチモ賞受賞！！



左からブレンダさん、恵子、喜雄、ジャニス・フォークスさん



故佐藤有三さん撮影のサッチモも後ろで微笑んで、

写真：Zach Smith, Kim Welsh, Rob Hunter

ワン・モア・タイム！
アンコールの掛け声とともに盛り上がった
セインツの熱いステージ

いやがうえにも盛り上がり、盛り上がったセインツのステージ、拍手が鳴りやまずアンコールとなる場面が何度も！



ニューオリンズ一番伝統的で、デキシーの古典ともなっている「ハイソサイティー」。クラリネット奏者を雇うオーディションにも使われた1901年のマーチ。「スウィング・まこちゃん」こと広津誠のクラリネットソロも、大いに盛り上がり「ワン・モア・タイム」となった。

広津君、その風貌も、まるでニューオリンズのクレオール風。本当に最近クレオールのクラ奏者、アルバー・トニコラスに似てきたから不思議である！



外山恵子のバンジョーで演奏した讚美歌リード・ミー・セイビアーもジョージ・ルイスのハートがこもっていた。バンジョーリズムで演奏した、サッチモの初のスキヤット「ヒービー・ジービーズ」の再現。サッチモが譜面を録音中落としてスキヤットが生まれた場面

面では、ルシアンが芝居がかって譜面を拾い、本場ニューオリンズの観客も大喜び。恵子のピアノのブギ「ホンキートンク・トレイン」にも絶大な拍手が寄せられた。そしてピアノ、バンジョーに加え、恵子の『地元仕込みのセカンドライン』の踊り！バンドも笑顔爆発の楽しい時間だった！

オー・ロッキン・チェアー・ゴット・ミー
ルシアンとの完璧なコンビに
後ろでサッチモも思わずにっこり

しかし何といってもセインツのステージで最高、そして2018 サッチモ・サマーフェスト No1 の呼び物となったのは、自分で言うのも気が引けるが、ルシアンと私(喜雄)の絶妙に息の合った「ロッキン・チェアー」の掛け合いだった。ご存知、ジャック・ティーガーデンとサッチモ、トラミー・ヤ

ングとサッチモの名コンビで歌われたこの曲。「僕はセインツのトラミー・ヤング！！」と私達との共演を楽しみにしてくれていたルシアン。私達ステージ全体が彼の参加で、本当にサッチモとトラミーの霊がよみがえってきた、と自画自賛したくなる出来で、本場ニューオリンズの人々もそのスピリットを感じてくれていた。

私たちが初めてルシアンにあったのは1971年。キュートなアフロヘアーでお兄さんのチャールスの大太鼓とともに強烈なスウィング・リズムをたたきだしていた当時15歳の少年。ルシアンと私達が47年後、完璧に同じ『サッチモの音楽』で心を通わせあっていることに、本当に不思議な『縁(えにし)』を感じた。

1時間20分のステージは、サマーフェスト全体でトップクラスの観客数と声援。終わっても拍手が鳴りやまず、時間オーバーのアンコール、『ワット・ア・ワンダフルワールド』で終わった。スナッグ・ハーバーのライブでも、興奮した観客の皆さんのスタンディング・オベーションとアンコール。そしてこのサマーフェストのステージでも、『セインツとルシアンの名コンビ』は「ジャズとサッチモの故郷」の人々に、忘れえぬ感動を感じてもらうことができたことと確信している。ルシアン、そしてメンバーの皆さんに心から感謝している。



演奏曲目：南部の夕暮れ、ハロー・ドーリー、ストラッティン・ウィズ・サム・バーベキュー、ロッキン・チェアー、ホンキートンク・トレイン、ハイ・ソサイティー、リード・ミー・セイビアー、ヒービー・ジービーズ、ビッグ・ノイズ・フロム・ウィネカ、聖者の行進、アンコール：この素晴らしき世界

外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、
 藤崎羊一(b)、木村おうじ(drms)
 スペシャルゲスト：ルシアン・バーバリン(tb)

フランス映画チームの密着取材、プリザベーション・ホールのインタビュー、サッチモ・アワード』受賞

天国のサッチモがまたまた、 これでもかと悪戯をしてくれたような旅 写真アルバム

このツアーが最後の出演になるかも・・・私が語ったことが大きな波紋を呼び、かえって嬉し過ぎる出来事が次々と起こる信じられない旅となった。

長年会報の編集と記事執筆を担当され、おしくも7月2日に天国に行ってしまったWJF理事で元産経新聞、夕刊フジ記者の小泉良夫さん。ミシシッピー河で散骨をして差し上げたいと、ご遺骨、お線香と並んで高校に寄付する楽器が入ったスーツケースを下げた始まった旅。終わってみると皆さんの魂や、天国のサッチモが悪戯をしてくれたような、世にも不思議な忘れえぬ、そして嬉しい旅となった。

フランスの映画チーム、突然のメールで いつの間にか密着取材に

ツアー出発の1か月前、フランスから突然のメール！ドキュメン



タリー映画作家の親子が、最近ニューオリンズで活躍する日本人が多いので取材をしたいとのこと。半信半疑でOKした結果、全ツアー期間の『密着取材に』！！

(映画作家ローレンス・ガブロンさんとナタン・シェーファーさん)



1912年大晦日サッチモが銃を発砲し逮捕された街角でのインタビューや、バディー・ボールデンの家も取材。入り

口に腰を掛け「バディー・ボールデンズ・ブルースを吹いた。



キッド・トーマスのお孫さんに遭遇!!!

映画チームはスナッグ・ハーバーのライブ、サッチモフェストのステージもちろん完全取材。ランドリー・ウォーカー高校への楽器寄贈にも同行。高校の門の前でお年寄りが声をかけてきた。なんと、ニューオリンズ時代一番尊敬し仲も良かったトランペッター、キッド・トーマス(1897年生れ)のお孫さんと、その方のお孫さん！偶然その場に居合わせたのだった！まったくの偶然！鳥肌が立つような不思議さを感じた。



ランドリー・ウォーカー高校では、2003年から支援を続けている

最高のバンド指導者、2012年に高校生たちと東北慰問に来日したウィルバート・ローリンズ先生に、寄付1000ドル、フルート、トランペット、WJF会報編集長山口義憲氏の娘さん岩崎あづささんのクラリネットを贈呈。



(ローリンズ先生、校長先生と。壁には気仙沼スウィング・ドルフィンズからプレゼントされた、友情の大漁旗と2012年日本訪問の写真が、素晴らしい子供たちの交流の思い出として飾られている。)





今回プレゼントした新品のトランペット。

びっくり!!! プリザーベーション・ホールからは 光栄なインタビューの申し込み

映画チームのためプリザーベーション・ホールでのインタビュー撮影をホールが寛大にも許可してくれ、逆に、

‘出来ればホールとしても別途インタビューを撮影したい、とのおんでもない光栄なハプニングまで！



1960年代終わりといえば、ホールの全盛時代、当時を知る人は本当に少なくなった。ついに私達は、当時を知る希少な生き証人になってしまったようだ。

ジョージ、今年も来ましたよ

バンドそろってジョージ・ルイスのお墓参り

一番ニューオリンズらしいクラリネット奏者ジョージ・ルイスは、1963年から3年続けて来日、毎年3か月にわたり全国の労音で公演、大阪のニューオリンズ・ラスカルズの皆さん、私達も大きな影響を受けた。今年もみんなでお墓参り、ジョージのレパトリーから、「バーガンディー・ストリート・ブルース」、「主の御許近く歩まん」をささげた。



ジョージ・ルイス・バンドのバンジョー奏者、ローレンス・マレローの楽器もお墓詣り。ジョージも喜んでいでしょう。

故小泉良夫さん、父母、そしてサッチモ 霊が天国から、きっと悪戯

この旅では、昨年亡くなった母、WJF発足の次年1995年に他界した父、そして私たちの活動を大きく広げて下さった小泉良夫さん慰霊の旅も兼ねたいと思い、小泉さんと母のミシシッピー河への散骨もさせていただいた。



遺影もステージを見守って、、、

ミシシッピー河にお線香の香り・ジャズ葬式散骨。 合掌



小泉さんが残された「感銘を受けた言葉」(左)にはマハトマ・ガンジーの言葉と共に、讚美歌「Just a little while to stay here」の歌詞も。

ワイルド・ビル・デビソンのコルネットと
ローレンス・マレローのバンジョー
ニューオリンズ・ジャズ博物館に寄贈!

今回の旅では、サッチモが感化院で手にしたコルネットも所蔵されているニューオリンズ・ジャズ博物館に、貴重な楽器の寄贈も行った。私達が1981年に招聘したシカゴジャズのスター、ワイルド・ビル・デビソンから譲り受けたコルネット。有名な「オールマン・リバー」、「捧ぐるは愛のみ」他を録音した名器。コルネットを吹く機会も少なくワイルド・ビル



のために博物館に、と寄贈をきめた。また、外山恵子所蔵のローレンス・マレローのバンジョーも寄贈を約束、、、ただし、まだまだ恵子、元気いっぱい。もしバンジョーを持てなくなったら、その時(笑)、という条件付きで寄贈を約束した。

《日本はニューオリンズの音楽が大好き》
ニューオリンズ大学 卒業生の卒論に!

最近、「日本はニューオリンズの音楽が大好き:という卒論が話題になっている。副題が「1940年代から2017年、日本のニューオリンズ音楽への関心の考察」。2017年5月ニューオリンズ大学の卒業論文で、執筆したのは同市在住のウィリアム・アーシャムボルト君。A4紙52ページの大作、本格的論文で1963年から3年続いたジョージ・ルイスの来日、大きく影響を受けた大阪のニューオリンズ・ラスカルズの1966年、71年の米国ツアー、同バンドのドラマー、木村陽一さんの米国留学、そして外山喜雄・恵子のニューオリンズ移住、続いて起こった早稲田大学ニューオリンズ・ジャズクラブ部員たちのニューオリンズ訪問やニューオリンズ合宿。ブルース系のミュージシャンも続き、現在ではジャズとブルースの両分野で日本人が定住し活躍している実態を、木村さんを始め、私達、そして現在活躍中のミュージシャンたちのインタビューを交え分析し考察を加えている名作。ネットでも *Nihon Wa New Orleans No Ongaku Ga Daisukidesu* で検索可能だ。

現在実際にニューオリンズに住み活躍している日本人は、早大ニューオリのOBで1985年以来滞米33年の渡邊眞理さん(p)。彼女は現在週4回もプリザベーション・ホールに出演する人気者。女性ドラマーで1998年から在住、ニューオリンズ・ドラマー歴20年にもなるマユミ・シヤラさん。早大ニューオリの他学生部員で、WJFの学生会員でもあった菊池ハルカさん(tb)は2014年から在住、トランペットで人気者のカーミット・ラフィンなどとも活躍している。同じカーミットのバンドでピアノの名演奏を聞かせる'Z2(ジーツー)'こと辻佳孝さんは2010年に定住し、現地にすっかり溶け込んでいる。ピアニストの不破加奈子さんは、ギター

のデトロイト・ブルックスさんと結婚、ダニー・バーカー・フェスティバルを立ち上げて頑張っている。

そのほかにもブルースのギタリストとして有名な山岸潤史さんは1995年から住み活躍。ギターではダーティ・ダズンのメンバーとして活動する新村健さんもある。1968年、初めてニューオリンズを訪れたとき、先輩の木村陽一さん、荒井潔さんのお世話になり、木村さんの車でミネアポリスまで連れて行っていただいたのも懐かしい。それから50年、ニューオリンズで活躍する日本人がとかく話題になるようになったことは、本当に嬉しいことだ。



左端:荒井潔さん、右から6人目恵子、4人目木村陽一さん
1968年2月バーボン・ストリートにて プリザベーション・ホールのオーナー、アラン・ジャッフェ夫妻、リサ、オレンジ、レース他



サッチモフェストのセインツのステージに駆け付けてくれた、右から菊池ハルカさん、辻佳孝さん、渡邊眞理さん、マユミ・シヤラさん



デトロイト・ブルックス(ギター)と奥さんの加奈子さん 2014年のサッチモ・サマーフェストで学校訪問やライブ、そして帰りのタクシーを手配して頂いたり、感謝です。まゆみさんも、空港へお迎え!! ありがとう!! 皆さん、ニューオリンズで頑張ってご活躍ください!!

初めてのニューオリンズから50年、WJF25年目、会報100号、ジャズ100年！ 若者間に高まるジャズ原点への関心！！

———外山喜雄・恵子

嬉しいことです！！音楽大学の若い皆さんが、ジャズの原点、ニューオリンズ、サッチモ、デキシールランドジャズに興味を持ってきています！！

浅草ハブ、浦安ハブのライブでもスウィング感が高まり、若者から年配ジャズファンまで、まるでかつての六本木『ジュリアナ』(笑)のお立ち台のような興奮に。

想えば日本ルイ・アームストロング協会がスタートした1994年7月。世界はモダンジャズ一色、ニューオリンズでも白人を中心とした街の雰囲気は、黒人なんて



どうでもいい、ジャズの故郷なんて知ったことか。また黒人層の方も敵意に満ち行き過ぎたプライドから、サッチモなんて白人に愛想笑いを振りまくアングル・トムとの

私たちが『銃に代えて楽器を

持とう』、『サッチモの孫たちのような才能を育てよう』、『ジャズの故郷なのにどうして学校に十分な楽器がないの?』…とニューオリンズの人たちに問いかけようと思ったのは、そんな背景がありました。そして25年、いま世界は大きく変わりました。2000年から2001年サッチモ生誕100年を迎え、アメリカではリンカーン・センターがニューオリンズ出身のウィントン・マルサリス(tp)を迎えてジャズ界の意識を大きく変えました。

日本では、日本ルイ・アームストロング協会が1994年にスタート、期せずしてアメリカに先駆けてサッチモとトラッドジャズ再認識の運動を皆様と一緒に歩いてきて、いま大きな流れが出てきています！！皆様と一緒に25年。日本のジャズの流れが少しずつ変わり、サッチモとニューオリンズとデキシールに大きな注目が集まっているのです！

『デキシールランド×昭和～ 祭りだ!ジャズだ! デキシールだ』——ジャズの原点ここにあり!

レポート:奥村清文(WJF 理事)

大型連休の後半、風薫る5月4日に小田急線「新百合ヶ丘駅」徒歩4分の昭和音大ユリホールで当大学の学生さんによる「芸術運営学科アートマネジメントコース企画制作演習企画」公演コンサートが、超満員のお客さんを集めて開催された。

開場の午後5時前には、すでに聴衆の皆さんが長蛇の列をなす盛況ぶりで、企画責任者の4年生の田中玖実さんは、『100年以上続いているJAZZの原点であるデキシールランドJAZZを特に若い方々に聞いてもらい、即興で演奏される音楽を楽しんで貰おう』と企画したと語る。

わが国を代表する外山喜雄とデキシールセインツ。外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)夫妻、粉川忠範(tb)、広津誠(cl)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)。に若手バンジョー奏者の青木研さん、昭和音楽大学の講師を務める池田雅明さんがトロンボーン演奏でゲストとして参加。

企画趣旨のとおり、外山さんがニューオリンズでのJAZZ誕生の背景をアカデミックに解説するかたわら、多くの名曲が演奏され観客のお客様達も大いに楽しまれた。ゲストの青木研さんもバンジョーを思い切りの良い熱演で大拍手。トロンボーンの前池田先生も素晴らしい演奏を披露。昭和音大の若い学生さんたちも持ち込んだ楽器と一緒に飛び入り演奏。最後にお馴染みの「聖者の行進」でお客様も巻き込んでセカンドラインのリズムで、舞台を下りて観客席まで傘を持って踊りまくる楽しいひと時でした。

例年12月、協会のクリスマスパーティーで金太郎飴のプレゼントをして下さる会員の水越有造さんも近所にお住まいで、10人近くのお知り合いをお誘いして聞きに来て下さっていた。

受付から会場整理、案内放送、スケジュール管理、演奏者との交渉など、特に多くの音大の女子大生の皆さんがまじめに運営されていたのが好印象を与えてくれました。

セインツの面々も期待に応えての熱演でした。次回以降も開催される事を期待しています。

デキシーランド×SHOWAを終えて

田中玖実(昭和音楽大学音楽芸術運営学科
アートマネージメントコース4年)

企画の経緯を語る前にデキシーランドジャズとの出会いについてお話ししたいと思います。私が初めてデキシーランドジャズという音楽を知ったのは、中学生の頃でした。私は、中学・高校と6年間、吹奏楽部に所属していました。文化祭や定期演奏会の際に「ディズニーメドレー」をトランペット、トロンボーン、クラリネット、チューバ、ドラムスの編成によってデキシーランドジャズスタイルで演奏しました。その時の、それぞれのメロディーが交わる感覚、陽気なリズムがとても楽しいと感じ、感銘を受けました。これがデキシーランドジャズのことを知り、好きになったきっかけです。

今回、私がこの公演を企画するにあたり“若者やデキシーランドジャズを知らない人へ、その魅力を伝える“という点を重視しました。ジャズの原点とされるデキシーランドジャズは、常に新しい音楽が現れる今、“古い音楽”と認識されがちだと感じています。しかし、この音楽は今もなお、各々の想いを込めて演奏される“生き続けている音楽”でもあると思います。

そんな中、現在の日本では演奏者やお客様の年齢層が高い傾向にあり、若者の演奏者、観客が非常に少ないと思います。コンサートでも、「ここで私が最年少？」と感ずることがしばしばです。“若者を中心に多くの方へデキシーランドジャズの魅力を伝えたい”その私の熱い想いを外山さんご夫妻に温かく受け取っていただき、今回の公演を実現することになりました。

多くの方々にお越しいただくために、新聞やラジオ等といったメディアを使用した宣伝や、学内、地域住民の方々、他大学の学生、ファンの方々等へのアプローチを学生間で話し合っていました。残念ながら学生の来場者は予定していた人数より少なかったものの、“とても楽しかった”、“今日でとりこになりました！”

等といった声を聞くことができました。また、最後の出演者の客席との共演コーナーで演奏したジャズコースの学生からは、“とても勉強になった。自分のレパートリーに取り入れたい”という感想が届いています。少しでも若者へデキシーランドジャズの魅力が伝わったのではないかと感じています。

学生以外のお客様からも“懐かしい”“また聴きたい、また企画して欲しい”“素晴らしい時間だった”と、全ての世代の方々からも大盛況でした。今回この素晴らしい演奏会を作り上げることができたのも、外山ご夫妻をはじめとするデキシーセイイツの皆様、青木研さん、



田中玖実さん(左)と外山さん

池田雅明先生のお力添えがあったことです。この場を借りて改めて感謝を申し上げたいと思います。

自分で企画した公演、またジャズの公演に携わるのは初めてのことで、大変なことも多くありましたが、その制作過程は本当に充実した時間でした。今回の経験を活かして、あらゆる公演にも柔軟に対応できるようなプロデューサーになれるよう今後も努めてまいります。そして、この先もデキシーランドジャズを好きでい続けます！デキシーランドジャズ界の益々の発展をお祈り申し上げます。

昭和音大 池田雅明先生(tb)から

昨夜は本当にありがとうございました！ 外山さんでなければこの企画は成功しませんでした！ 心から感謝いたします。また機会がございましたら、何かとどうぞよろしく願いいたします！(^^) 奥様にもよろしくお伝えくださいませ。

池田先生(写真右)はバークリー音楽院、NYマンハッタン音楽院で学ばれた経歴を持ち、昭和音大の講師としても活躍中のトロンボーン奏者。池田雅明先生からフェイスブックでご連絡いただ



いたのは、去年2017年の7月。大学の生徒さん企画のコンサートに賛同頂けるかとのお問い合わせでした。その10月、横濱ジャズの元町パレードに、その生徒さん田中玖実さんと芸術文化環境論の教授を務められる古橋祐先生がいっしょになって、『是非ジャズの原点を取り上げたい』という若い熱意に感激。半年、企画を練り、田中さん発案のタイトル・・・『デキシーランド×昭和～ 祭りだ！ジャズだ！デキシーだ』…。連休の新百合丘が盛り上がりました！！

ニューオーリンズ・ビートにしびれる！

ジャズ・ブラス・ガンボ！！

洗足学園音大ジャズ科、クラシック科の若者たち

昭和音楽大学と並んでジャズコースに力を入れ、多くのジャズマンが教鞭をとっている洗足学園音楽大学。WJFの例会にも出演していただいたトランペッター・原朋直さん、スウィングジャズ・クラリネットの若手第一人者・谷口英治さんも同大学で指導している。

この音楽大学には、学生さん達によるニューオーリンズ・スタイルのブラスバンドがある。WJFの15周年パーティー、クリスマスにもゲスト出演していただいた、モダンジャズ・テナーサックスの名手・中村誠一さんが洗足学園の教授時代、すっかりニューオーリンズに魅了されこの『洗足学園音楽大学ジャズ・ブラス・ガンボ』を結成、今ではジャズ科の学生のみならず、クラシック科の学生さんたちまで参加している。

現在は名クラリネット奏者の谷口英治さんが、誠一さんから指導を引き継ぎ、ニューオーリンズ・サウンドの虜になる音大生を生み続けている。

この度、このジャズブラスガンボの皆さんが谷口さんを通じ連絡を下って、5月30日、「スペシャル・ニューオーリンズ・ジャズ講座」を私たち夫婦で担当させていただきました。ドラムロールの魔術師、木村おうじ君も参加、ジャズの原点のスウィング感を、本当に若い皆さんに感じていただき、大変喜ばれた。

私たちも、原点にあこがれてニューオーリンズへ旅立った50年前、若かったころを思い出しました！！

若いっていいな！ 谷口さん、アリガトウ！！

オーイエス！！スウィングしなけりゃ意味ないヨ！！

歌うように吹いてみよう

歌うようにスウィングしよう！ と提案

スペシャルジャズ講座は、まずはガンボの皆さんの演奏を聴かせてもらうことから始まった。

女性トロンボーン奏者で“ガンボ”のリーダー皆木葉奈さん(3年)のリードで、最近ニューオーリンズで演奏されるようになったアイル・フライ・アウェイ(I'll fly away)、バーボン・ストリート・パレード、セカンドライン等を演奏。私が、全体のアンサンブルのまとめ方やスウィング感覚等、演奏で気が付いたことを指摘させてもらいながら、若い皆さんと一緒に演奏。木村おうじ君もスネアと大太鼓で参加 How to New Orleans 講座となった。

ガンボの演奏で気が付いたのは、リズム隊、メロディー隊のビート感の統一が必要なこと。また、ただ吹きまくるのではなくて、全員がお互いに聞きあうことだった。



♪エーメン、聖者の行進…♪ クラス全体がニューオーリンズの教会に！！ 原点のスウィングを実感した若者たち

彼らが、I'll fly away を楽しそうに全員で歌いだしたとき、歌っている彼らの楽しい気分がリズムを楽しくさせること。そして、歌うことでサウンドが澄んできてスウィング感が出しやすくなることに気が付いた。楽器を吹くときも歌うような感覚で、、、歌でアンサンブルをしてもらったり、リフを口ずさむことで、音大生で感覚が鋭い彼らは旨くスウィング感をとらえていた。

ジャズ講座では、ジャズのルーツとなった教会のゴスペル、ブルース、ワークソング、マーチなどを解説し、ガンボのメンバーと補欠のメンバーを加えた25人ほどに、谷口先生に加わっていただき、全員の手拍子と

外山恵子のピアノで、エーメン、聖者の行進を黒人教会張りに全員で合唱、スウィング感を体験してもらった。私は牧師の役割で合いの手を入れ、そのタイミングで全体をスウィングさせと、サッチモ的トヤマ・ワールドに、若者たちは夢中になってくれた！

スウィング感体験タイムにつづき、スライドショーで私たちのニューオリンズ武者修行、1920年代の希少な映像等を上映し、スペシャル・ニューオリンズ・ジャズ講座を終えた。

お役に立てたことは大変嬉しいことです。感覚の鋭い若い音大の皆さんが、原点のスウィング感をつかみ、ジャズに新風をもたらしてもらえれば嬉しい限りです。

谷口英治さん(c1)から、その日お礼が

本日は誠にありがとうございました。学生にとっても私にとっても大変貴重な体験となりました。伸びざかりの彼ら彼女らには、本日のクリニックは強力な栄養となると思います。外山さんがお帰りになった後も、名残惜しそうにステップを踏んだりリフを口ずさんだりする学生の姿が微笑ましかったです。またこういう機会を持ちたいと思いますので、そのときはまたご相談に乗ってください。



谷口英治さん



洗足学園の若きトランペッター達



(前列左から)谷口英治さん、外山夫妻、木村おうじさんを囲んで洗足学園音大ジャズ科、クラシック科の皆さん

思い出のサッチモ・フェスト2003 初出演

“サッチモ一家”に迎えられた!

——外山喜雄

初めて2003年、サッチモ・サマーフェストのゲストに呼んでいただいてもう15年になる。昨年以外、すべてに出演させていただいているのは、本当に光栄なことだ。

初めてサッチモのレコードにふれたのは中学時代、父の転勤で住んでいた九州の久留米の近く羽犬塚であった。東京出の『新入社員の兄さん』が僕の憧れの存在となり、会社の寮の『お兄さんの万年床』の周りには『東京発の最新文化』ジャズのEPレコードが転がっていてその一つが『サッチモ大使の旅』だった。当時は知る由もなかったがコロムビア・レコードの大プロデューサーだったジョージ・アバキアンさんの代表的レコードだ!

その後、その方がこのEPレコードをプレゼントしてくださり、ジョージさんに直接サインをしてもらうことができた。不思議なサッチモの悪戯…だと思う。

1959年、高校に進み brass バンド部に入部、ジャズに開眼させてくれたのが、一年先輩でバンドのトランペット・スターだった奥山康夫氏だった。渋谷スウィングやエビスのブルースカウに連れて行っていただき、僕のジャズ人生がスタートした。高校、大学を通じて“サッチモ・ホット・ファイブ、セブンどっ

ぷりの生活が始まり、『教科書』となった名盤の多くがジョージさんプロデュースのコロムビア・レコード・シリーズだった!

その後、1968年からニューオリンズに住んだおかげで、全米、全ヨーロッパからジャズの聖地を訪れるジャズ界のコアな人々やジャズマンに出会い親しくなることができた。そして、2003年第2回サッチモ・サマーフェストに初めて出演した際、伝説のジョージ・アバキアンさんと、サッチモの親友で写真家のジャック・ブラッドレイさん、元ダウンビート誌、ジャズ・ジャーナル誌編集長ダン・モーガンスターンさん…いわゆる、サッチモの世界ではトップでコアな『サッチモ一家』にお会いすることができたのだ。

その年、『日本からサッチモを演奏する日本人が来る』というので『サッチモ一家』は興味津々、ステージの最前列に陣取っていた。一家のプレッシャーの視線の中、サッチモのテーマ「南部の夕暮れ」が始まり歌に入ると、一家の顔が嬉しそうな優しい顔に



サッチモ一家。右からダン・モーガンスターンさん、ジャックさん、奥様ナンシーさん=2003年8月、サッチモ・サマーフェストで

変わった。そして、私が、サッチモが1926年、「ヒービー・ジービーズ」で歌詞カードを落とし、スキヤットボーカルが生まれた、その再現をやったとき、彼らは何とステージの真前で、まさに転げまわって地面をたたいて笑い転げていたのだ! 怖いジャズ評論家先生ぞろいの『一家が』である! 以来、私たち夫婦は『サッチモ一家』公認の家族として迎えられた。

ジョージさんは、この再現が特に気に入ってしまい、その年の10月、NYサッチモハウスがオープンし、夫婦で招待された際、CBSテレビのデイビッド・レターマン・ショーに出演させるんだとかなり動いてくださっていたが、残念ながら実現しなかった!

ジャック・ブラッドレイさんご夫妻、ダンさんとも、以来今でも大変親しくさせていただいている。天国のサッチモが結んでくれた縁である。



サッチモのマウスピースを手にジャック・ブラッドレイさん=2005年8月、サッチモ・サマーフェストで



サッチモと親友ジャックさん



ジョージさんと私たち夫妻=2008年8月、サッチモ・サマーフェストで

ワット・ア・ワンダフルワールド考

昨年2017年は、サッチモの“この素晴らしき世界・・・ワット・ア・ワンダフルワールド”が録音されて50年という記念の年だった。録音当時はあまり有名にならなかったこの曲が、サッチモが亡くなって16年、1987年の映画「グッドモーニング・ベトナム」の挿入曲として使われ永遠のヒットともいえるメガヒットとなった。きっと100年後、200年、500年後にもこの曲は、サッチモの歌で聴かれ続けることだろう！そのレコーディングの生い立ちは、私たちに色々な事を考えさせてくれる。

この曲ならと、サッチモの心意気

“素晴らしき世界”というテーマでサッチモが歌う作品を作ろうと思ったレコード・プロデューサー、ボブ・シール。コルトレーンの至上の愛や、サッチモとデューク・エリントンの競演盤を作った名プロデューサーの企画だ。サッチモも、この曲のテーマ、メロディー、歌詞すべてに惚れ込み、ギャラは最低ユニオンレートでも良いからと録音に参加したというから、その心意気も感激だ。でも皮肉なことに、レコード会社ABCの社長は、この曲が嫌い、サッチモも嫌い、プロデューサーのボブ・シールも大嫌い、ロクなプロモーションもなかったという。ベトナム戦争の最中、政権への「付度」も？などと考えてしまう。でも、当時はこの社長を含めて“何と我儘で、のどかで、牧歌的なノリの人々が謳歌した世界だったのだろう”という変な感激を覚えたりもする。(笑)

オリジナルは本当に純粹、我がまま、かつ牧歌的

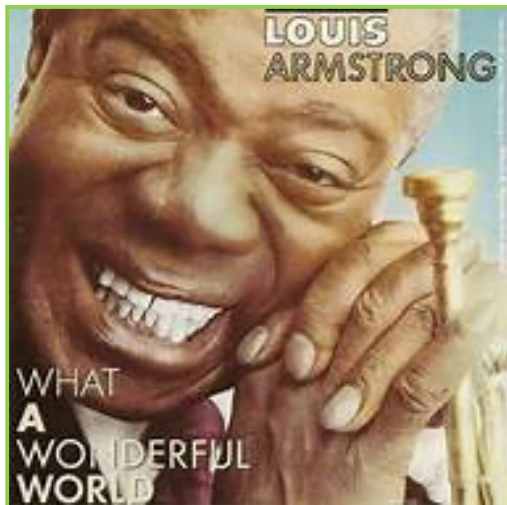
15年ほど前、ロックスターのロッド・スチュアートが“この素晴らしき世界”のほか、スタンダード曲を歌ったアルバムがビルボード誌で全米ヒットチャート1位となった。スティービー・ワンダーを始め、トランペットのアルトゥーロ・サンドバル、ピンクパンサーのテーマを吹いたサックスのプラス・ジョンソン等々、多くの共演ゲストを迎え、新聞の見出し風に言えば、“スタンダードを歌う往年のロック・スター、サイドを固めるスターとのコラボレーション！”と言ったところ。でも、あまりにも“仕掛けのヨロイ”がギラギラする企画。これに比べると40年前ワンダフルワールドのオリジナル・ヒットの背景は、本当に我がまま、かつ牧歌的で純粹だ。でも、音楽やジャズは、そして、生きている人間が住むこの世の中も、そうでなくっちゃ！とも思う。

記念碑的な作品にしようとした集まったメンバー

サッチモのワンダフルワールドにも、そのような仕掛けが全くなかった訳ではない。ワンダフルワールドが録音された196

7年8月16日、スタジオにはジョー・ワイルダー、クラーク・テリー(tp)アービー・グリーン、J. J. ジョンソン(tb)ハンク・ジョーンズ(p)グラディー・テイト(drms)等そうそうたるメンバーが参加、この日の録音を“サッチモと素晴らしい世界”をテーマに記念碑的な作品にしようとしたプロデューサーの意図を感じないではない。しかしそれは計算というより、“ジャズの王様サッチモ”を敬愛するミュージシャン達が、サッチモを愛する余り馳せ参じた結果、と言った方があっている。

1900年7月4日生まれのジャズの王様サッチモは、1970年7月70才の誕生日を迎えた。(後になってこの誕生日が間違いで、本当の誕生日は1901年の8月4日だったことが分かったのだが・・・)レコード業界でも生誕70年記念録音の企画が実現し、1970年5月末、サッチモのゴスペル的な斬新



なバージョンのワンダフルワールドほか、10曲ほどが録音された。この録音に馳せ参じたミュージシャンのリストは正に驚嘆に値する。

サド・ジョーンズ、マイルス・デービス、ケニー・バレル、ボビー・ハケット、トニー・ベネット、チコ・ハミルトン、エディー・コンドン、オーネット・コールマン・・・、50人を越える有名ジャズ・ミュージシャン、歌手、評論家！！そこには、ジャズ界をあげて“ハッピーバースデイ・ポップス！！ 親爺さん

誕生日おめでとう”と言わずにいられない熱い想いとハートウォーミングな真心があふれ、企画が本来持っていたかも知れない「下心」を、すっかり圧倒してしまっている。

ただ目の前のお客さんに喜んでもらおうと毎日・・・

サッチモはあるインタビューでこんな事を言っている。“確かに私はいつの間にか大物になったよ。色々な国へ行って、王様の前や法王の前でも演奏したし・・・、若くて駆け出しだったニューオーリンズ時代に、私が将来こんな事になるなんて誰かに言われたら、怖じけずいてしまったと思うよ！ 私は大物になろうなんて思った事はないし、自分の能力を証明しようなんて思ったこともない。ただ目の前のお客さんに喜んでもらおうと毎日必至になってやってただけさ・・・。で、ある日、気が付いたらこうなっていただけなんだよ・・・。”

サッチモ、ベイシー、エリントン、マイルス・・・私たちの愛する素晴らしき音楽“ジャズ”は、皆、そうではないか。目の前のお客様と音を通じて心を通わせ、楽しんでもらおうと必至になっている内に気が付いたら、“この素晴らしい世界に愛される”音楽になっていた。

(外山喜雄)

小泉さん 安らかにお休みください！
夕刊フジのサッチモ、永眠



訃報 日本ルイ・アームストロング協会の理事で、産経新聞、夕刊フジでご活躍された小泉良夫さんが7月2日にご逝去されました。77歳。会報ワンダフルワールドの編集を担当、素敵な記事を毎号発信、次号100号記念に向け、ご闘病中にもかかわらず、力を振り絞って6割を作ってください、

あの世へ旅立たれました。ご葬儀は7月10日家族葬で行われ外山喜雄・恵子のデュオでお好きだった「セントジェームス病院」を演奏し送らせていただきました。

小泉さんは、夕刊フジ編集部時代の1995年から「WJF」の活動を応援、1997年より協会理事、2007年9月発行会報、ワンダフルワールド通信52号から全面的に編集をご担当下さいました。現役時代の、ご本人曰く“公私混同のサッチモ記事”は社内でも有名で、「夕刊フジのサッチモ」と呼ばれていたことを最近同紙OBホームページで知りました。小泉さん、有難うございました。天国で安らかにお眠りください。

(下は、3年前のお仲間への年賀状 富子夫人とサッチモの家で)

あけましておめでとうございます

平成27年(2015年)乙未元旦



ルイへ。私は、もうあなたのお宅を訪ねたのは、これで10数回です。この玄関先で、あなたが子供たちにトランペットを教えているシーンが忘れられません。あなたの思い出を秘めて…。

昨年夏も、ジャズ夫妻、外山喜雄・恵子さんと一緒に「サッチモの旅」でニューオリンズ〜ニューヨークへ行ってきました。この写真は、ジャズの王様、ルイ“サッチモ”アームストロングの生前のお宅(現ルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム=LAHM)を私たちが訪ねた時のものです。サッチモと子供たちが座っていたレンガの階段に私たちが座って、はいパチリ!の一コマ。

お祈りします。合掌。(山)

ご寄付と嬉しいお手紙

ありがとうございます

◆早稲田大学高等学院三七の会様 50000 円

昭和37年卒業の早大学院同窓の皆様が、文科大臣表彰のお祝いを6月3日早稲田で開催、会費からご寄付をくださいました。

◆岩崎あづさ様(武蔵野市)

クラリネット WJF理事、会報ワンダフルワールド通信編集長山口義憲さんのお嬢様より頂きました。



嬉しいお便り

ファンでWJF会員、小暮弘道・裕子ご夫妻より

『ニューオリンズ市での受賞本当におめでとうございます。このニュースを聞いて、日本のジャズファンが受賞したような気分になりました。今までの努力を黙ってはいられないという、ニューオリンズ市の気持ちが表れたものだと思います。これからは、健康に十分留意されて無理のない活動をされるように願っております。

暑すぎる夏に…...2018年8月 小暮弘道・裕子』

——本当にありがとうございます。

皆様と共にこの賞を受賞させていただきました! 外山拝

会員募集中

=WJF年会費=

一般会員 (General Membership)	¥6,000
学生会員 (Student Membership)	¥3,000
賛助会員 (Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせ:WJF事務局

TEL:047-351-4464

FAX:047-355-1004

Email:saints@is9.so-net.ne.jp

編集長から

ワンダフルワールド通信「100号!」▼トップを飾る「祭りだ!ジャズだ!デキシンだ!」の記事は、会報WJF通信の編集担当、小泉良夫さんの絶筆です。▼四半世紀に亘るWJFの活動をつぶさに伝えてきたWJF通信の約半分は小泉良夫さんが編集を担当。産経新聞、夕刊フジで編集の腕を振るった小泉さんは、WJF通信の編集メインスタツフとして、ジャズとWJFへの溢れる愛情をバックに、数多の名レポートを送りだしてきました。▼7月2日にご逝去された小泉さんのご遺骨の一部は、8月、外山夫妻により、ミシシッピ河に散骨されました。▼この夏のニューオリンズでは、外山喜雄 サッチモ・アワード「受賞のビッグ・ニュースが米A.P.通信を通じて世界へ、ロス共同通信で日本に配信され、多数のメディアでその記事が報道されました。またフランス映画チームによる外山夫妻の密着取材、名門ジャズクラブでのデキシン・セイソンの演奏がインターネット中継されるなど、大注目を浴びた現地レポートが100号の記念特集です▼この記念特集は、小泉良夫さんに捧げる特集でもあります。小泉さんのご冥福を謹んでお祈りします。合掌。(山)